



*日本語の響き

現代文編

一 随想
「待つ」と「待つこと」

川上未映子

二 小説(一)
羅生門

芥川龍之介

三 評論(一)
水の東西

山崎正和

四 詩
旅上

萩原朔太郎

五 小説(二)
清兵衛と瓢箪

志賀直哉

六 評論(二)
情報と身体

吉岡洋

七 短歌・俳句
その子二十

与謝野晶子ほか

八 小説(三)
なめと山の熊

宮沢賢治

九 評論(三)
なぜ私たちは労働するのか

内田樹

十 広告を読む

柳澤桂子

11 随筆を書く

加藤周一

12 レポートを書く

見取り図をもとにして

13 意見文を書く

新聞投書

14 情報を読む

統計資料の読み方

15 広告を読む

実用的な文章

16 17 ページ

18 19 ページ

20 21 ページ

22 23 ページ

24 25 ページ

26 27 ページ

28 29 ページ

30 31 ページ

32 33 ページ

34 35 ページ

36 37 ページ

38 39 ページ

40 41 ページ

42 43 ページ

44 45 ページ

46 47 ページ

48 49 ページ

50 51 ページ

52 53 ページ

54 55 ページ

56 57 ページ

58 59 ページ

60 61 ページ

62 63 ページ

64 65 ページ

66 67 ページ

68 69 ページ

現代文編

表現教材

古文編

漢文編

◎定評のある教材に加え、現在最も注目されている著者の作品をバランスよく配列。「読解から表現へ」では、「比較」「要約」など、読解を表現へ結びつける技能を抽出し、教材と関連づけて解説しています。

◎「教室でともに学ぶ」ということを大切にしながら、さまざまな活動をコンパクトにまとめました。現代文編の「読解から表現へ」ともリンクさせています。

◎中古・中世を中心に、国語総合で読んでおきたいジャンル・作品を網羅して配列。「文法から解釈へ」は、文法を学ぶことで解釈が深まることを実例をあげて解説し、文法を学ぶ意味を明らかにしました。

◎漢文の基礎を確実に身につけられるよう、段階的に学習できる入門教材を設定しました。また、故事・漢詩・史話・思想・文章・小説と、主要なジャンルの定評ある教材をそろえました。

古文編

一 古文入門 児のそら寝(宇治拾遺物語)

◆文法から解釈へ① 古語辞典

◎古文を読むために① 歴史的仮名遣い/五十音図・いろは歌

◆文法から解釈へ② 用言

◎古文を読むために② 品詞分類/用言と活用形/動詞/省略

◆文法から解釈へ③ 接続助詞「ば」

◎古文を読むために③ 形容詞/形容動詞/係り結び/仮定条件と確定条件

◆文法から解釈へ④ 助動詞

◎古文を読むために④ 助動詞

◆文法から解釈へ⑤ 助詞

◎古文を読むために⑤ 助詞

◆文法から解釈へ⑥ 助詞

◎古文を読むために⑥ 助詞

◆文法から解釈へ⑦ 助詞

◎古文を読むために⑦ 助詞

◆文法から解釈へ⑧ 助詞

◎古文を読むために⑧ 助詞

◆文法から解釈へ⑨ 助詞

◎古文を読むために⑨ 助詞

◆文法から解釈へ⑩ 助詞

◎古文を読むために⑩ 助詞

◆文法から解釈へ⑪ 助詞

◎古文を読むために⑪ 助詞

◆文法から解釈へ⑫ 助詞

◎古文を読むために⑫ 助詞

◆文法から解釈へ⑬ 助詞

◎古文を読むために⑬ 助詞

◆文法から解釈へ⑭ 助詞

◎古文を読むために⑭ 助詞

◆文法から解釈へ⑮ 助詞

◎古文を読むために⑮ 助詞

◆文法から解釈へ⑯ 助詞

◎古文を読むために⑯ 助詞

◆文法から解釈へ⑰ 助詞

◎古文を読むために⑰ 助詞

◆文法から解釈へ⑱ 助詞

◎古文を読むために⑱ 助詞

◆文法から解釈へ⑲ 助詞

◎古文を読むために⑲ 助詞

◆文法から解釈へ⑳ 助詞

◎古文を読むために⑳ 助詞

◆文法から解釈へ㉑ 助詞

◎古文を読むために㉑ 助詞

◆文法から解釈へ㉒ 助詞

◎古文を読むために㉒ 助詞

◆文法から解釈へ㉓ 助詞

◎古文を読むために㉓ 助詞

◆文法から解釈へ㉔ 助詞

◎古文を読むために㉔ 助詞

◆文法から解釈へ㉕ 助詞

◎古文を読むために㉕ 助詞

◆文法から解釈へ㉖ 助詞

◎古文を読むために㉖ 助詞

◆文法から解釈へ㉗ 助詞

◎古文を読むために㉗ 助詞

◆文法から解釈へ㉘ 助詞

◎古文を読むために㉘ 助詞

◆文法から解釈へ㉙ 助詞

◎古文を読むために㉙ 助詞

◆文法から解釈へ㉚ 助詞

◎古文を読むために㉚ 助詞

◆文法から解釈へ㉛ 助詞

表現

- 1 スピーチをする——対話型スピーチ
- 2 話し合いをする——ビブリオバトル
- 3 プレゼンテーションをする——五枚のフリップを使って
- 4 デイベートをする——マイクロデイベート
- 5 随筆を書く——一枚の写真から
- 6 手紙を書く——依頼の手紙
- 7 レポートを書く——見取り図をもとにして
- 8 意見文を書く——新聞投書
- 9 情報を読む——統計資料の読み方
- 10 広告を読む——実用的な文章

16 ページ

漢文編

一 漢文入門 漢文の世界へ/漢文の構造と訓読の仕方

◆置き字と再読文字

◆古典の扉 身近にある漢文

◎古文を読むために① 漢文の基本形式/漢文参考略年表

◆古典の扉 借虎威(戦国策)/蛇足(戦国策)

◎古文を読むために② 漢和辞典の活用

◆古典の扉 春曉 孟浩然 静夜思 李白 江雪 柳宗元

◎古文を読むために③ 送元二使安西 王维 黄鹤楼送孟浩然之广陵 李白

◆古典の扉 凉州词 王翰 春望 杜甫 登岳阳楼 杜甫

◎古文を読むために④ 香炉峰下、新下山居、草堂初成、偶題東壁 白居易

◆漢詩の表現

◎古文を読むために⑤ 漢詩の表現

◆古典の扉 鶏口牛後(十八史略)/先從隗始(十八史略)

◎古文を読むために⑥ 晏子之御(史記)

◆古典の扉 歴史を記録する

◎古文を読むために⑦ 論語・孟子

◆古典の扉 孔子と門人

◎古文を読むために⑧ 雑説 韓愈

◆古典の扉 復活 干宝

◎古文を読むために⑨ 小説

◆古典の扉 読み継がれる「小説」

◎古文を読むために⑩ 常用漢字表/古典文法要覧/古典文学史年表/漢文の基本形式/漢文参考略年表

◆古典の扉 折り込み 近現代文学史年表

◎古文を読むために⑪ 資料 古時刻古方位ほか/装束/住居/調度/平安京条坊図ほか/京都付近地図ほか

◆古典の扉 前見返し 旧国名都道府県名対照図

◎古文を読むために⑫ 後見返し 中国参考地図

一 随想

● ぐうぜん、うたがう、読書のススメ(川上未映子) 読書論
本とはどのようにして出会うのか。本はどうか選べばよいのか。本を読むと何が起るのか。それらの答えは、結局は本を読むことでしか得られない。それならば、偶然手に取った本から読み始めるのも一つの方法ではないか。国語の教科書を読むことから始まった自らの原体験をもとに語る、読書のすすめ。

● 「待つ」ということ(鷲田清一) 社会論
さまざまな道具の発達は「待たなくてよい社会」をもたらした。しかし、それは「待つことができない社会」への入口であり、「待たない社会」から「待てない社会」へと続く階段でもあった。かつて「ありふれたこと」だった「待つ」ことが、今では「法外に難しく」なりつつあることの原因と意味とを問いかける。

二 小説 (一)

● 羅生門(芥川龍之介)
平安時代の荒廃した都を舞台に、生きるために自らの悪行を正当化しようとする老婆と下人の姿をとおして、人の心のありようを描く。『今昔物語集』に収められた「羅城門上層見死人盗人語第十八」の逸話を想を得た、近代短編小説を代表する作品。
● ゴール(三崎重紀)
裏通りの空き地に掲げられた「ゴール」と書かれた横断幕。毎月のように場所が変わるといふそのゴールは、いったい何のゴールなのか。現実と非現実を織り交ぜながら、漂流する現代の不安を描く。

三 評論 (一)

● 水の東西(山崎正和) 比較文化論
鹿おとしと噴水から連想される西洋と日本との文化の違いを、「流れる水と、噴き上げる水」「時間的な水と、空間的な水」「見えない水と、目に見える水」といったキーワードを用いながら、二項対立の形式でわかりやすく説明する。

● 言語は色眼鏡である(野元菊雄) 言語論
雪や牛肉の種類から虹の色の数まで、世界をどのように言葉で表すかは、言語によって異なる。つまり、人は言語という「色眼鏡」越しに世界を見ているのだ。それぞれの言語には固有の論理があるが、そこに上下の区別があるわけではない。言語の違いを例に、文化の多様性の認識と異文化理解へとつながる道筋を提示する。

● 自然をめぐる合意の設計(関礼子) 環境論

外部から眺めた自然保護についての「遠景の語り」は、その自然に暮らす人々の「近景の語り」とは相容れない場合がある。自然保護の合意形成のためには、唯一解としてリジッドな制度を構築するのではなく、ゆるやかに曖昧な合意を目指すべきだと主張する。

四 詩

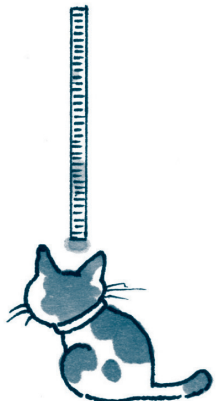
● 旅上(萩原朔太郎)
「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し……」遠い異国の地への憧れをみずみずしく描いた、萩原朔太郎の詩壇デビュー作。

六 評論 (一)

● 情報と身体(吉岡洋) 情報論
情報ネットワークが発達し、「空間的距離や時間的遅れはほとんど縮小されていく現代。その一方で、身体を移動させる機会は減少し、かえって人はますます狭い世界の中に安住するようになっていまいか。技術の発達による恩恵は享受しながらも、同時に「人間が常に身体を伴った存在であること」を再確認する必要性を説く。

● 「P」の科学から「J」の科学へ(池田清彦) 科学論
二十世紀が厳密性と普遍性を追求する『もの』の科学の時代だったとすれば、二十一世紀は個別性と多様性への目配りが必要な『こと』の科学の時代になるはずだ。複雑化する現代社会において求められるものの見方・考え方を提起する。

● コインは円形か(佐藤信夫) 認識論
コインが「円形」なのは一つの視点から見た場合であつて、それがコインの全容ではない。価値が多様化し、異文化圏との交流が日常的な時代においては、「自分の視点と自分の言葉遣いだけ」を信じることなく、「認識的な思いやり」をもつことが求められる。身近な事例に、物事を多角的な視点から捉える意義を論じる。



サーカス(中原中也)

オノマトペ、七五調、リフレイン……さまざまな詩的技術を駆使して描くサーカスの情景に、自らの不安定な姿を忍び込ませる。中原中也の代表作。
● I was born(吉野弘)
英語の受身形から、生まれることが受身であることに気づいた少年が、父との会話の中で生死の悲しみを受け止めていく過程を描く散文詩。
● 崖(石垣りん)
第二次世界大戦末期、サイパン島で追いつめられ崖から飛びこまなければならなかった少女たちの悲劇は、未だ終わっていないことを告発する。

五 小説 (二)

● 清兵衛と瓢箪(志賀直哉)
瓢箪集めに熱中する少年清兵衛は、ある日、震いつきたいほどにいい瓢箪を手に入れ、学校にまで持っていく。しかし、見とがめた教員がそれを取り上げ「家庭で取り締まっていたらどうしよう」と通告すると、以前から清兵衛の趣味を快く思わない父親は瓢箪を全て割ってしまふ。個人の趣味と周囲の無理解とをユーモラスに描く小編。
● 青が消える(村上春樹)
一九九九年の大晦日の夜、世界から青い色が消えた。「僕」は友人に電話をかけ、町中を歩いて青が消えた理由を尋ねてまわるが、答えは得られない。それはばかりか「誰も消えた青のことなんか気にしてはいなかった」。愛するものの喪失と、他者と思いを分かち合えない不条理とが生み出す、とまどいや哀しみを描いた物語。

九 評論 (二)

● なぜ私たちは労働するのか(内田樹) 労働論
「やりがいのある仕事」を求め、離職・転職を繰り返す若者は多い。だがそれは、受験勉強とアルバイトが涵養した、本質の欠如した労働観の産物にすぎない。個人の努力と集団の利益との関係を手がかりに、働くことの意味と理由を喝破する。

● 命は誰のものなのか(柳澤桂子) 生命論
医療技術の発達により、以前であれば確実に死に至る病やけがでも、一命をとりとめることができるようになった。それは生きる機会を広げる一方で、「死ぬ権利」が問題となる事態を招いている。終末期医療をめぐるのは、アメリカでの事例をきっかけに、海外で法律の整備などが進められているが、日本においても「治療の存続を患者自身が決めるもの」という考え方が大きくなりつつあるようである。しかし、その考え方が「正しい」とも言えない。「正しい」答えのない複雑な課題に対して、さまざまな意見に耳を傾けることを提言する。

● 創造力のゆくえ(加藤周二) 芸術論
新・旧の対立でものを考えることは、近代化の過程において現れざるを得なかった傾向である。しかし、創造するということは「古いものを忘れて新しいものをその代わりに受け入れる」ことではなく、「古いものを受け入れて新しいものをそこに付け足す」ことだ。そのためには、創造的な仕事に人格の全体を投じ、古いものを全て学びつくすことが必要である。徳川時代の芸術や思想に範をとり、日本の創造力が向かうべき道筋を示す。

七 短歌・俳句

● その子二十——短歌十六首
与謝野晶子・斎藤茂吉・北原白秋・石川啄木・近藤芳美・寺山修司・佐佐木幸綱・河野裕子の短歌を二首ずつ収録。また、「今日の短歌」として、小野茂樹・俵万智・渡辺松男・穂村弘・東直子の作品を収録。
● いくたびも——俳句十六句
正岡子規・高浜虚子・種田山頭火・橋本多佳子・西東三鬼・中村草田男・山口誓子・細見綾子の作品を二句ずつ収録。また、「今日の俳句」として、坪内稔典・長谷川權・小澤實・夏石番矢・黛まどかの作品を収録。

八 小説 (三)

● なめとこ山の熊(宮沢賢治)
なめとこ山で熊撃ちをして生きる淵沢小十郎は、殺した熊にも礼儀をつくし、熊の言葉だつてわかるような気がするほどの男だった。熊たちも彼を好いており、一度小十郎が見逃した後、彼の家の前まで来てから死ぬまでのまていた。そんな小十郎が、冬のある日に向かった山で遭遇したできごととは。東北の厳しい自然に生きる、人と動物の交流譚。

● 空缶(林京子)
長崎で被爆した五人の女生徒。それから三十年がたち、母校に集った彼女たちは、それぞれの事情を抱えながら大人になっていた。語り合う中で浮かびあがる、少女の頃の日々と今なお苦しむ後遺症。作者の実体験と思いがこめられた自伝的小説。

現代文編

「もの」の科学から「こと」の科学へ

池田清彦

二十世紀は科学の時代であった。もちろん、二十世紀も科学の時代になることがない。しかし、その中身は大きく変わるはずだ。『もの』の科学から『こと』の科学へ。...

「現代評論を読むために」で詳しく解説します。評論を読むにあたって重要な語句は、巻末の「現代評論を読むために」で詳しく解説します。

論理的思考へと導く評論教材

教材として定評のある評論から、近年注目されている評論家の文章まで、幅広く収録しました。現代社会の諸問題を取り上げて論じた文章にふれることで、主体的な思考を促します。

山梨県RDB(昆虫類) チョウ類. Table with columns: No, 種名, 生息環境, 分布状況, 絶滅状況, 山梨. Includes a bar chart showing distribution and a detailed text block for 'チャマダラセリ' (Chamadara Serii).

文章だけでなく、表やグラフなどと関連づけてさまざまな情報を読み解く力を養います。

小論文につながる「コラム」読解から表現へ

「引用」「要約」「論理構成」などのスキルを、教材本文を用いて解説する「コラム」読解から表現へ」を設けました。教材の読解が表現活動に広がり、小論文を書く力につながります。さらに表現教材にもリンクしています。

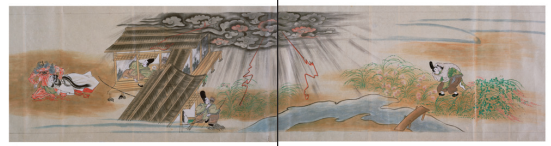
読解と表現のつながり. Diagram showing the flow from reading to writing. Includes a table for '読解と表現のつながり' and a section for 'レポートを書く' (Writing a Report).

古典編

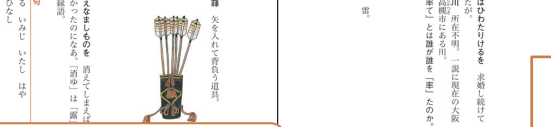
伊勢物語

芥川

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経よほむわたけるを、からうじて盗み出て、いと暗きに来けり。芥川といふ川を幸て行ければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。行く先く、夜も更けにければ、東ある所と知らず、神へいとみまじり鳴り、雨もいたる降りければ、あばらなる



『伊勢物語巻』(鎌倉時代のものを江戸時代後期に模写)



『伊勢物語巻』(鎌倉時代のものを江戸時代後期に模写)

読解を支える工夫を凝らした古典教材

図版や資料を配置したり、内容理解のポイントを脚間で示すなど、古典の読解を助ける工夫を随所に凝らしました。

作品の成立年代を示した「成立年代バー」。文学史におけるその作品の位置がひと目でわかります。

成立年代バー. A vertical bar chart showing the relationship between the founding year of the work and its position in literary history. Includes a section for '助動詞' (Auxiliary Verbs).

古典文法を確実に身につけるコラム

古文編では、教材を例に文法を解説した「文法から解釈へ」で、文法を学ぶ意味が実感でき、理解がより深まります。さらに、「古文を読むために」で文法事項を整理し、文法を確実に身につけます。漢文編では、句法や形式を詳説したコラムを設けました。

漢詩の表現. Detailed text explaining the structure and meaning of classical Chinese poetry, including examples and analysis.